

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780269

研究課題名(和文)現代日本社会における性同一性障害医療から見るジェンダー

研究課題名(英文)Concept of gender in Medical treatment of GID in Japanese society

研究代表者

鶴田 幸恵 (TSURUTA, Sachie)

千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：00457128

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：性同一性障害からトランスジェンダーへの、性を越境する行為の位置づけの脱精神医療化の過渡期に、本研究は位置づけられる。第一には、精神医学との関わりを、特に精神科医へのインタビューに着目し分析した。これは、国際学会で査読付きの発表をし、現在進行形で分析を進めている。第二には、トランスジェンダーの中でも、性別二元的ではないあり方で生きていくXジェンダーの分析を行い、これは学会発表をすると共に、論考が書籍に収められた。第三に、性同一性障害とトランスジェンダーの差異に敏感な活動家に注目した調査をおこなった。すでに6名にインタビューを終えており、今後の調査研究への展開が見込まれる。

研究成果の概要(英文)：This study explores the move away from the pathological treatment of trans-sexual activity in Japan, a move that is symbolized by the conceptual transition from "Gender Identity Disorder" to "Transgender." First, I analyzed the relationship between psychiatry and trans-sexual activity, based on interviews with a psychiatrist. This work was presented at an international academic conference. Second, I focused on "X-gender" people who struggle to overcome the male-female dichotomy in their ordinary lives. This work was reported at an academic conference and published in a book. Third, I turned my focus to transgender activists who are sensitive to the difference between "Gender Identity Disorder" and "Transgender." I have conducted interviews with six clients and have planned subsequent research based on the analysis of the data from the interviews.

研究分野：社会学

キーワード：性同一性障害 トランスジェンダー ジェンダー 医療 概念分析

1 研究開始当初の背景

性を越境することが医療化されることによって、受け入れが劇的に進んだ性同一性障害というものに相当する人びとが抱えている問題を明らかにする、という当初の目的は、性同一性障害が広まっている日本の現状を射程にいれたものだった。この問題は、現在、LGBTのTとしてのトランスジェンダーの問題だと捉えられているだろうし、そこでのトランスジェンダーとは、性同一性障害とは「水と油」の関係にある、脱精神病理化された概念である。そのままに「過渡期」に、本研究は位置づけられるだろう。

当初、LGBTのTとしてのトランスジェンダーというよりは、性同一性障害の人びとの経験に着目しようと思っていたが、現在では、性同一性障害を持つ人の経験と、トランスジェンダーの経験の差異を考慮することが重要だと認識している。本研究の結果は、そのため、両者の差異に着目することになっている。

2 研究の目的

当初の性同一性障害だとされる人びとの抱える問題を、医療に関する側面、特に、性同一性障害の診療場面における性別の取り扱いに焦点を当て分析することを一つの目的としていた。

また、男女という二元では捉えられない性別のありようを主張するようなトランスジェンダーについても、分析を進めようとしていた。

それに加えて、「水と油」だとされる性同一性障害とトランスジェンダーという概念の差異を、きちんと見据えていくために、活動家にインタビューし、分析を進めていくことを目的とすることにした。

3 研究の方法

まずは、かつて撮影した性同一性障害のカウンセリング場面の録音・録画の分析と、精神科医へのインタビューの分析を、会話分析という手法により、発話の組み立てとして、またその発話を行為として分析する、ということに着手した。

二元的でない性別のあり方については、インタビューした、Xジェンダーというトランスジェンダーの下位分類に関する分析を、ゴフマンという社会学者の相互行為に関する知見を利用しながら、進めていった。

4 研究成果

(1) 性同一性障害の診断場面における性別の取り扱い

一年目は、疾病名が Gender Identity Disorder から、Gender Dysphoria に変更になり、これから日本の医学会でどのように診断がなされるようになっていくのかを調べるため、日本精神神経学会のシンポジウムをはじめ、脱医療化に関するシンポジウムにできるだけ参加し、情報収集を行った。またそれをもとに、世界的な動向の中での日本の取り組みについて理解するため、国際的な動きについて、日本の性科学の第一人者にプレインタビューを行った。

二年目は、まず性同一性障害の診断場面の録音・録画データの分析を開始した。発表するために、データの選出を行った。次年度以降、会話分析の専門家の集まり(CAWG)で、データセッションを行ってもらおうよう予約した。

医療者のインタビューについては、分析を行い、EMCAの国際会議で査読付きの発表を行った。またCAWGでのデータセッションにおいて、より分析を相互行為分析として精緻化した。

国際的な動向と合わせた性同一性障害概念の利用については、2016年4月に刊行された論集に寄稿し掲載された。また性同一性障害に特化した学会のシンポジウムで発表も行った。次年度の学会のテーマセッションにも採択された。

(2) 女/男という二元的ではない、より多様化した性としての生き方

一年目は、X gender という性自認を持つ人びとへのインタビューのコネクション作りを行い、キーパーソンを捜し当てた。一人は自助活動を行う団体の代表である当事者、もう一人は、X gender に関する博士論文を書いた研究者である。それを元に、これも、実際の調査への展望が開けた。

二年目は、FtX および B01 の当事者にインタビューしたものを、ゴッフマンの方法論の論集に寄稿し掲載された。

(3) 会話分析の全面取り入れと「活動家」への着目

三年目からは、研究を転回した。第一に、1997年から行っている関東地方での性同一性障害コミュニティでのフィールドワーク、2006年から行っている関西でのフィールドワークの結果を、会話分析という観点から捉え直すということを始めた。週に4時間の会話分析の訓練をはじめとし、分析のためのコレクション作りを進めた。

第二に、トランスジェンダーの運動家へのインタビューを積み重ね、今後も継続できることになった。近年、当事者に接触するのが

難しいという感触を持っていたが、当事者同士が交流するための、性同一性障害やトランスジェンダーに特化したコミュニティが東京地方ではなくなっているのではないかと、という見立てができた。そこで、LGBTの枠組みで活動している運動家のなかで、トランスジェンダーである人に焦点をあてることにした。そのような人は、どれくらいいるか、どこにいるか、などを把握できており、3人へのインタビューを行った。複数人にインタビューの申し込みをし、継続してインタビューをすることが期待できるようになった。

分析結果は会話分析ではまだかなわないが、概念分析という方法論で進めた。歴史記述の方法論も検討しながら、分析を進めていく目処が立った。

四年目は、昨年に引き続き、トランスジェンダーの活動家、6名にインタビューを行った。そのうち2人以外は、長期間の間隔をあけた、2回目のインタビューであった。

当初は、市井の当事者へのインタビューを予定していたが、活動家に焦点を当て、話を聞いていくのがよいと判断し、インタビューの相手を活動家に絞った。

活動家に注目するようになったのは、以下の理由による。消極的な理由としては、市井の当事者にインタビューをするために、アクセスするのが困難であること、またコミュニティの中の多様性が増大し、アクセスできても代表性をどのように考えるべきかわからないからということである。積極的な理由としては、かつてインタビューを行った人びとが、現在コミュニティを牽引する活動家になっており、つながりも、貴重な立場からの話が聞けるということである。その結果、性同一性障害とトランスジェンダーという概念の差異に、活動家が敏感であることがわかり、これを第一の理由とすることにした。

その結果を持って、「水と油を乳化する」というトランスジェンダーと性同一性障害を差異化する実践を記述する論文を執筆した。これは、トランスジェンダーと性同一性障害という概念の概念分析という側面から書いたものである。

トランスジェンダーは、ジェンダーの境界にゆらぎをもたらすことに結びついているのに対して、性同一性障害はジェンダーの境界を維持することに結びついていることなどを知見とした。

今度、収集したインタビューデータを用いて、二つの概念がどのように結びついているのか、あるいは相反しているのかなどについて、論考を書いていく見込みが見えてくると同時に、活動家に焦点を当てたインタビューを継続するべきという手応えを得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

[1]「水と油を乳化する 性同一性障害とトランスジェンダーの対立を無効化する実践」鶴田幸恵 『社会学論集』46:17-38 査読なし 2017

〔学会発表〕(計 5 件)

[2]「シンポジウム 中年期・老年期のGIDに対する理解と支援 在職トランス」と職場の声」鶴田幸恵 第18回GID学会：日本教育会館 査読なし 2016

[3]「問題経験の語りと専門的知識 『生き方』としての性同一性障害 実質的な脱医療化」鶴田幸恵 第42回保健医療社会学会：追手門学院大学 査読なし 2016

[4]「疾患・障害カテゴリーにおける当事者性と支援 『ライフスタイル』としての性同一性障」鶴田幸恵 第63回東北社会学会：弘前学院大学・青森県観光物産館アスパム 査読なし 2016

[5]「性同一性障害概念の変遷 大衆化と非病理化」鶴田幸恵 平成28年度地域貢献事業「知る・学ぶ・伝える equality」：奈良女子大学 査読なし 2016

[6]“The psychiatrists’1 logic of diagnosis in the care of gender identity disorder”, Sachie TSURUTA The International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis Conference 2015, University of Southern Denmark 査読あり 2015

〔図書〕(計 3 件)

[7]「性同一性障害として生きる 『病気』から生き方へ」鶴田幸恵 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根(編)『概念分析の社会学2 実践の社会的論理』ナカニシヤ書房 査読なし pp.46-64 2016

[8]「『他者の性別がわかる』というもう一つの相互行為秩序 FtXの生きづらさに焦点を当てて」鶴田幸恵 中河伸俊・平英美・渡辺克典(編著)『触発するゴフマン』新曜社 査読なし pp.72-103 2015

[9] “The Multi-layered Character of the Relevance of Sex Category.” 鶴田幸恵 『ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究 専門的概念の再帰性に着目して』 査読なし 自費出版 pp.59-64 2014

6 . 研究組織
(1)研究代表者

鶴田 幸恵 (TSURUTA, Sachie)
千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：00457128